

涸沢北穂高岳奥穂高岳山行報告書

記 岩井 正志

参加者

C L土屋康広

西岡康広

岩井正志

西岡和代（会員外）

期間

岩井正志は5月15日から18日まで

前述

私が登山に興味を持った理由は大きく分けて二つあります。

一つは読書が趣味であり、明治期から昭和初期においてアルピニズムに傾倒した文豪が多く、何故なのか疑問を感じた事です。芥川龍之介の「河童」の冒頭が河童橋の記述から始まることは有名です。

もう一つは14年前に他界した父の蔵書です。登山とは一見縁のない父は新田次郎の作品を多く持っていました。そこで代表的な「孤高の人」読みますと、硬質な文体で綴られた作品の中で加藤文太郎の人生から何を読みとったのか？「業に生き、業で死ぬ」と言う人の営みを記したこの作品群は隔絶した父を紐解く鍵となると考えたのです。

友人にレクチャーを受け、一人で山行を繰り返した挙句、千葉山の会の門を叩きました。

5月15日晴天

19時新検見川駅集合

一度、西岡邸に戻り和代夫人に同乗していただく。

一路、東関道自動車道を進み、首都高速から中央自動車道へ。

新島々にて必要物資を購入のうえ

24時に沢渡駐車場にてテント設営宴会の上就寝。

5月16日晴天

5時30分に起床の上。

6時にタクシー乗車、上高地へ向かう。

7時上高地出立

10時横尾着

12時本谷橋着

16時涸沢着

テント設営

17時から食事宴会

20時就寝

5月17日雨天

4時起床そして朝食

雨天のために停滞。

12時天候の合間を取って奥穂高岳へ。

14時ザイテングラード取りつきへ

ここで下山開始

15時涸沢へ

16時から食事宴会

20時就寝

5月18日晴れのち雨

4時起床そして朝食

6時テント撤収

7時涸沢出立

11時横尾到着

14時小梨平到着テント設営

入浴

15時30分バス乗車東京へ

反省

今回の山行で岩井正志が感じた事は力不足。知識、技術、体力すべてにおいて足りないという事が一点。半面、非常に有意義でありました。お二人（土屋氏、西岡氏であります。）のレクチャーは知己に富み、経験談は痛快で分かりやすい解説でした。土屋氏の奥様とのなれそめの話をお二人が今でも納得しえずに論じている所は愉快でありました。

ザイテングラードにて踵を返した理由も西岡氏は自分の下山技術に問題ありと説明していただきました。

しかし、本質的には体力不足は否めないと思います。

山行中様々な光景が目に入りました。

朝焼けの山塊です。



そしてニリンソウの群落



山行は非常に爽快。景色は風光明媚。何より食事が最高に美味でした。
ステーキ、酢豚、ポテトサラダ、ワインは2本程を開けさせていただきました。(ビールは
除く) 私は下山後2 kg太りました。

今回の山行を題して、
東海道中膝栗毛ならぬ「涸沢道中呑兵衛記」と名付けたいと思います。

西穂高 独標 スノバー探し求めて5か月

記 土屋 康広

「涸沢道中呑兵衛記」の岩井氏と5月18日 上高地で別れて西岡夫妻 土屋が小梨平で大雨の中テント設営。

19日 上高地から新穂高に行き、独標にスノバーを求めて歩行を開始した

このスノバーはこの1月、独標に置き忘れた大事な冬山登山装備（下山後に気が付く）

これまでスノバーの回収したく3月 4月と計画したが天候が悪く実現しなかった。

残っている訳もないスノバーを何故に追い求めるか、その理由はスノバーに「ちば山」のネームが記入されている、このちば山のスノバーを独標に野晒しに放置しておきたくなかった。

もうひとつは、個人的な事であるがこのスノバー、私は5月春山 厳冬期の西穂高～槍ヶ岳の縦走に何回か使用している思い出のある装備であるからである。

はっきり記憶にあるのは、厳冬期の槍ヶ岳からキレットを通過して、北穂高の登りの雪面に滑落停止の支点として、このスノバーを雪の中に打ち込んだのを覚えている。

それぞれの装備にその時、その時の記憶が刻まれている、失うのは偲びがたい中もう残っている訳がないと思いつつ独標を目指した。

20日快晴の独標に、残念ながら残っていなかつた、西穂山荘と入下山管理所にスノ

バーが届けられていないか確認したがなかった。

あのスノーバーは何処に行ったのやら？



